夢／橋製作所日誌

村瀬潤
JUN MURASE

猫が会長の会社

私は夢ノ橋製作所というデザイン会社で働いているしがないデザイナー。
好きなお酒はウイスキー。

私の勤めている会社の事務所は私の社長にしてこの会社の社長である人物の自宅でもある。なので社長の奥さん（副社長）と息子も当然住んでいる。
それと飼い猫が一匹。このは猫のくせに“キャット空中三回転”ができないという変わり種。そのため棚から墜落し後ろ足の骨を折る全治は三ヶ月の大けがを負った事がある。その時の地面をのたうち回る姿はさながら“ネズミ花火”のようであった。

ちなみにこの猫が我が社の会長。

会社でのヒエラルキーは、飼い猫である会長が一番上。その下が社長の奥さんで副社長（というよりは影の社長）。その下が社長で、最後に私となる。

時々、私はどこで道を誤ってしまったのだろうかと、本気で悩むことがある。
そんな“会長が猫”という素敵な職場での日々を綴りたいと思う。

振り返れば奴がいる

我が社では、迂闊に後ろ振り向いてはいけない。

その理由をお話する前に、まず我が社のでの机の配置を説明すると私と社長の机は社長の机の右側の通路を挟んで私が社長に背を向けて座っている状態だ。なので社長からは私が何をやっているかが一目瞭然。一方、私からは社長が何をやっているか全く見えないという構図。
なので背後で何がおこなわれているのかは私が振り向かないと分からない。
前を向きながら分かるのは社長の貧乏揺すりが、とてつもなく凄まじいということくらいだ。
なので振り向くときには後方に座って居る社長に一言声をかけてから、ということになる。
もし声をかけないで後ろを振り向いてしまうとどうなるか？

知りたくもない人のフェティシズムをうっかり覗いてしまうことになる。

あれは、本当に気まずい。うっかり振り向いちゃって
少女のアラレモナイ姿を目撃しちゃったあとに
「あ、こ、このコ、AKB48のメンバーらしいんやけど…知ってる？」
などと言いつつ慌ててインターネットブラウザを閉じつつ、こちらに顔を向けて脂汗を流して笑っている社長と目があってしまって、どう声をかけていいものか咄嗟に思い浮かばず、何とか
「い、いやぁ…知りません」
と答えた後の気まずい空気は本当に耐え難い。

だから、我が社では迂闊に振り向いてはいけない。

嗚呼、憧れの少女漫画家

昨年の冬、お正月明けに社長と決別しようかと、
本気で悩んでいた時期があった。

それというのも社長が新年早々に「今年、俺は少女漫画家になる!!!」と宣言したためだ。これだけなら、今までにも何回かあった世迷言としてのらりくらりと受け流す流すこともできたのだが、どうも本気らしく、さらにその漫画を製作するのあたって私がそのアシスタントとして、かなりの量の仕事をしなければならない事が判明。きいてみると社長、付けペンを使ったこともないとのこと。そうなると、まずは線を引く練習から始めないとならないわけで…。さらにその後に聞かされた“初夢で神の啓示を受けて閃いたという少女漫画の構想”が、日曜朝８時半から某TV局で絶賛放映中の少女向けアニメの設定と瓜二つだった。

その点を注意したら
「貴様はこの俺の崇高なアイディアを破廉恥なセーラー服を着て月に替わって
お仕置きするようなアニメのマガイモノのそのまたマガイモノと言うのか！」
と怒られた。
「俺はそんな二人で手を繋いで悪者を退治するような百合っぽいアニメは観たことがない！　だからパクってなどいない！」
と言い放ったのでる。
「社長、それって初代…ですよね。初代から観てるんじゃ…」
と呆れ顔で言ったのが癇に障ってしまったのであろう。
「貴様は社長を愚弄するのか！」
と怒鳴られた末に
「じゃぁ、お前が考えてみろ！」
と無茶ぶりされることになった。

いや、私、別に少女漫画なんて描きたくないんだけれど。

そのままでは、他の仕事にも支障をきたすことになりかねないため、やむ終えずその場は私が謝って謝って謝り倒して怒りを納めてもらうことに成功した。ただし、その代償として少女漫画を描くにあたり、アシスタントをしなければいけなくなってしまったのだが。まぁ、背に腹は変えられない、という事で納得するより仕方ないのだろう。とほほ。その後、私は社長に「少女漫画家を目指す！」と宣言されたショックが思いのほか大きく、それからしばらくは転職を本気で考えたのだった。ただ、社長には少なくない恩義があるので事はそう簡単にはいかず、結局のところ、私は今でも虹の橋製作所（仮）で働いている。

嗚呼、私はただ、静かにもくもくと仕事がしたいだけなのに。

しかし何故少女漫画なのだろう。社長と少女漫画は…あまり合わない気がするのだが。

ひょっとするとあのくまのプーさんにそっく…げふんげふん…のあのボディの中に乙女回路を内蔵しているのかもしれない。

あれから一年、社長からは折に触れて少女漫画家になりたいと言われ続けているのだがいまだにネームの一つも見せてもらえていない。少女漫画家への道はかなり遠いだろう。

ちなみにこの文章を書くにあたり、“少女漫画”を“処女漫画”と打ち損じた回数は両手両足の数では足りない。もう少しタイプの練習をした方が良いのかもしれない。